

小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ開発

A Development of a Prototype for Elementary School English Activities Classes

辻 伸 幸

Nobuyuki TSUJI

(附属小学校)

2008年10月1日受理

Abstract

Improvement in teaching skills in elementary English education is becoming an issue of urgency in order to prepare for Foreign Language Activities (mostly English Activities) which will become compulsory in all public elementary schools in 2011.

This paper aims to develop a prototype for elementary school English Activities classes, especially for upper grades to aid teachers in the development of their teaching skills. This model takes into consideration on a prototype that has been proposed for the lower elementary classes and other prior work. It is composed of seven stages: 'warming-up', 'familiarizing students with English sounds and fundamental expressions, especially in listening', 'familiarizing students with the sounds by verbalizing them', 'quasi-communication activities that act as a bridge to communication activity', 'communication activity', and 'self-evaluation'.

1. はじめに

本研究は、英語活動授業展開の先行事例や低学年における授業展開プロトタイプ(江利川、辻、東、2007)を基盤として、6年生の授業実践を行う中で改良を加え、高学年英語活動に適した授業展開プロトタイプを開発し提案することが目的である。さらに、英語活動の指導力を高めるため、様々な教員研修の場で活用できるようにすることも目的である。

本プロトタイプを用いて担任が主体的に授業展開をすることができれば、英語活動の目標である「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(文部科学省、2008)ことにつながる。

2011年度から新学習指導要領が完全実施される。外国語活動(実質は英語活動)が、小学校高学年(5、6年生)で年間35コマ必修化することが大きな変更点の一つである。文部科学省は、外国語活動で、「指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこと」(文部科学省、2008)と明言している。外国語活動の専科教員やALTを大量に配置することが財政面、人材面から考えて困難であることを推察すると、全国の高学年の担任が主体となって授業を実施していかなければならないことを意味する。

外国語活動の必修化に備えて、全公立学校に外国語

活動を中心的に取り組む中核教員を任命し、外国語活動の指導における理論や技術を研修する事業が全国の県や市の教育委員会で、2008年度から行われている。各学校の中核教員は、勤務校で伝達講習を行い、教員の外国語活動指導技術の向上を目指す計画である。

しかしながら、担任が主体となり英語活動を指導していくためには、これだけでは、不十分であり、多様な場で現職教員研修が質的にも量的にも充実していかなければならないのは周知の事実である(バトラー 2005; 伊藤、金澤 2006; 泉 2007; 金森 2003; 金澤、伊藤 2007; 高橋 2006)。本研究で開発した授業展開プロトタイプの適応で、日本語とは音声面などで大きく異なる英語に対する抵抗感を最小限に抑え、英語によるコミュニケーション活動での喜びを増大することにつなげることができ、現職教員研修で質的な指導力向上が期待される。指導の展開がスムーズに進めば、指導への不安が強い小学校教員(ベネッセ教育開発センター、2007)にも英語活動指導の負担を軽減する一助にもなる。

2. 英語活動における授業展開の先行事例

英語活動における授業展開は、どのような進め方があるのか先行事例を挙げ、それらに共通する点を考える。

津田塾会(2007)では、授業の1ユニットを3レッスンに分けて図1のような流れで行うように提案している。

「今日の文字」、「今日の音」は、文字と音との関連性への気づきを扱うもので、アルファベットの文字と音に焦点と当てた活動である。

岡、金森(2007)は、図2(最初のあいさつと最後のまとめ・あいさつは毎時間設定しており図では省略)のように5年生の単元展開例を示している。

樋口、金森、國方(2005)は、授業の展開について、小学生の発達段階や目標等を考慮して、小学校独自の授業展開(図3)の必要性を示している。

図1、図2、図3から、英語活動の授業展開における必要な構成要素が共通点として浮かび上がってくる。言語材料の導入を行った後、練習をして、コミュニケーション活動という流れである。

【授業のはじまり】

あいさつ、「今日の文字」、「今日の音」

【言語材料の紹介】 Lesson 1

ゲーム、チャンツ、歌などの楽しい活動を通して新しい言語材料を紹介する。

【言語材料の練習】 Lesson 2

テーマに沿って内容を膨らませ、コミュニケーション活動を最低1つ含め、新しい言語材料を練習する。

【言語材料の応用】 Lesson 3

児童が既習の言語材料を創造的に応用した活動を行う。

【授業のおわり】

まとめ、ふりかえり、あいさつ

図1 津田塾会(2007)の授業展開例

1時間目

【導入】語彙の導入：クイズ

【聞く活動】歌

【聞く・話す】クイズ

【復習】

2時間目

【復習】

【聞く活動】ゲーム

【コミュニケーション活動】ゲーム

3時間目

【復習】

【発話の活動】ゲーム

【聞く活動】クイズ

4時間目

【復習】

【発話の活動】ゲーム

【聞く活動】クイズ

【発話の活動】ゲーム

図2 岡、金森(2007)の授業展開例

【ウォームアップ】音の流れや基本表現に慣れる。

【復習】

【モデル対話の提示】音の流れや基本表現に慣れる。

【練習】音の流れや基本表現に慣れる。

【ゲーム・遊び】実際の場面の中で有用な表現を何度も繰り返す。

【体験・創作活動】コミュニケーションの実体験

【活動の振り返り】

図3 樋口、金森、國方(2005)の授業展開例

樋口、金森、國方(2005)が述べるように、英語活動の目標に迫ることのできる授業展開であることが絶対条件である。新学習指導要領の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。中学校のように言語スキル習得を目標とせず、外国語を用いてコミュニケーション能力の素地を養うことが終着点なのである。この目標を達成させるために、コミュニケーション活動を体験させることは外すことができない。

コミュニケーション活動で必要となる語彙や表現に十分に慣れ親しませることも共通点である。慣れ親しませる方法は、歌やゲーム、チャンツ、クイズといった児童の発達段階を考慮したもので、楽しく慣れ親しませるものである。コミュニケーション活動を行う時には、必要となる語彙や表現を自然と使うことができる段階になっていれば理想的である。

3. 英語活動の授業展開プロトタイプ

図4は、すでに発表した低学年における授業展開のプロトタイプ(江利川、辻、東、2007)である。低学年の児童たちが、日本語にはない英語のリズムや音声に慣れ親しむことは、比較的容易である。ただし、低学年の発達段階に合致した教育内容と教育方法が必要である。

低学年のプロトタイプをそのまま高学年に取り入れても英語嫌いを増やすだけである。それは、高学年の発達段階に合致しないからである。高学年の指導上の留意点として樋口、金森、國方(2005)は、以下の5点を挙げている。

- ・興味・関心に沿っているか：「楽しい」から「知的に楽しい」と感じられる活動の工夫をする。
- ・自己表現の場があるか：「英語を使ってみよう」

という動機づけが与えられるような創造的な活動を取り入れる。

- ・主体的に活動しているという実感がもてるか：やりがいがあり、英語を使っている実感がもてる活動を工夫する。
- ・教材が世界に広がっているか：英語学習の必要性を理解できるように、「外国のことをもっと知りたい」という意欲を満たす教材、活動を工夫する。

【係のあいさつ】

英語係が前に出て、掛け声をかける。

“Let’s enjoy English! — OK.”

“Let’s sing a song.” など子どもたちの英語で授業を始める。

【ウォームアップ】

本時の学習活動に関連する英語の歌を楽しむ。

【慣れる】

本時の学習活動で扱う単語や表現をチャンツを通して慣れる。

【伝える】

本時の表現を使ってコミュニケーション活動を行う。

【振り返り】

今日の活動について振り返る。

図4 小学校低学年の英語活動プロトタイプ

先行事例からの共通点と高学年の指導上の留意点を認識し、高学年の授業展開において、児童たちがいかにしてスムーズに言語材料に出会い、練習をして、コミュニケーション活動へと移ることができるかを「小学校高学年の英語活動授業展開プロトタイプ」（図5）として提案し各段階項目を順に説明する。

【ウォームアップ】

高学年にとってもウォームアップは、重要である。英語活動の時間まで、児童たちは国語や算数、理科、社会というような日本語のみの授業を受けている。各教科・領域では、日本語でしっかりと意味を理解し、自分の考えを整理して、発表するように要求されることが多い。それに対して、英語活動では、日本語の発音とは大きく異なった英語を使わなくてはならない。さらに英語活動で触れる単語や表現について意味も完全に理解できないことも多い。したがって、精神的には不安な状態であり、ストレスも高いことが推測される。このような心的状況をリラックスさせたり、ストレスを低くしたりする大切な役割を果たすのがウォームアップである。

基本は、高学年の発達段階に合致したもので、知的好奇心をくすぐるようなクイズなどが非常に適している。

【始まりのあいさつ】

【ウォームアップ】

前時や本時の学習活動に関連するクイズや歌などをする。

【聞くことに慣れる】

コミュニケーション活動で使用する表現を聞くことに焦点を当てて慣れる活動を行う。

【発音することに慣れる】

コミュニケーション活動で使用する表現を発音することに焦点を当てて慣れる活動を行う。

【コミュニケーション活動の橋渡しの活動】

コミュニケーション活動で使用する表現を使って、コミュニケーション活動へつながる橋渡しの活動を行う。

【コミュニケーション活動】

必然性のあるコミュニケーション活動を行う。

【振り返り】

今日の活動について振り返る。

【終わりのあいさつ】

図5 小学校高学年の英語活動授業展開プロトタイプ

【聞くことに慣れる】

聞くことに慣れる活動は、言語スキルに関連している。英語活動は言語スキルの習得を目標としないという鉄則があるため、スキルに関連する活動を軽視する可能性がある。コミュニケーション活動を行うためには、スキルは必要なのである。

聞くことが外国語学習においてかなり重要であると認識されてきたのはごく最近である。Morley (2001) は、その変遷を以下のように述べている。

In the 1970s, the status of listening began to change from one of neglect to one of increasing importance. Instructional programs expanded their focus on pragmatic skills to include listening as well as reading, writing, and speaking. During the 1980s special attention to listening was incorporated into new instructional frameworks. Prominent among these were formats that featured functional language and communicative approaches. Throughout the 1990s, attention to listening in language instruction increased dramatically.

英語活動においても最初の段階は、聞くことに重点を置くことが大事である。しかし、英語活動を指導する中で困難なのが、語彙や表現を使えるレベルにまで慣れ親しませることである。1週間に1時間しかない英語活動の授業という時間的制約から、聞くことに慣れる活動が極端に少なくなることが考えられる。絵カードを使って1回か2回聞かせるだけで、すぐに教師の発声に続けてリピーティングさせる指導を数多く筆者は観察してきた。日本語とは大きく音声面が違う英語をクイズや歌、教師によるデモンストレーション、ICTなどを駆使しながら楽しく聞くことにのみ特化した活動で十分に慣れさせる時間が必要である。量的な面を克服するために朝の会などを使って短時間の聞くことに慣れる活動の導入も有効であろう。

【発音することに慣れる】

聞くことに慣れる活動の次にくるのが、発音することに慣れる活動である。この段階も言語スキルに関連する。コミュニケーション活動で必要となる語彙や表現を聞くことに慣れる段階でしっかり理解した後、日本語の発音とは大きく異なる英語を発音するための口慣らしの段階である。

筆者は、6年生の児童たちにコミュニケーション活動として京都の外国人観光客にインタビューを行う国際交流活動に取り組ませた。児童たちの反省の中に、「英語は日本語と違うので、使う時に舌をかみそうであった。」とか、「覚えていた英語の表現を忘れてしまった。」などの意見があった。これらの問題は、発音することに慣れる活動が不十分であったためである。いかに、この段階が大切であるかが理解できる。

この段階においても、小学校の発達段階をしっかりと考慮して進める必要がある。教師の“Repeat after me.”に続けて単調に何度も同じ表現を繰り返し練習させる方法はよくない。この練習方法は、訓練的で強制的になりやすい。児童たちは、行うことに意味があまり存在しない訓練的で強制的なものを嫌う。英語活動では、特に関心や意欲・態度を重要とする立場から、英語嫌いをつくらないことが求められる。

単純なりピーティングではなく、ゲーム的で遊びを取り入れた発声練習を行うことが必要である。例えば、チャンツなどは、小学生高学年でも十分、活用できる。テンポやリズムを自由に変化させることのできる電子キーボードはチャンツに最適である。テンポやリズムを変化させながらチャンツを行い、教師やグループで競ったりすれば、児童側としても強制的で訓練的な練習ではなくなる。また、コンピュータのサーバーに練習するための音声を保存しておき、リピーティングやシャドウイングを行うことも考えられる。

発音することに慣れる活動も児童たちの負担を最小限にするために単語からチャンク(完全な文よりも小

さな「言葉の塊」)そして、文へとスモールステップで発音することに慣れる活動を構成することも大切である。

【コミュニケーション活動の橋渡しの活動】

語彙や表現に十分慣れ親しんでいても、いきなりオーセンティックなコミュニケーション活動を導入すると児童たちには、負担が大きくなる。このギャップを埋めるために筆者は、コミュニケーション活動の橋渡しの活動を組み入れることを推奨したい。学級内で擬似的なコミュニケーション活動を取り入れるのである。

例えば、シミュレーションがある。京都の外国人観光客にインタビューすることが最終目標でオーセンティックなコミュニケーション活動であると設定する。必要な語彙や表現を聞いて、発音することに十分、慣れた後にシミュレーションをコミュニケーション活動の橋渡しの活動として組み込む。希望する児童が京都の外国人観光客役になって、児童たちが練習してきたインタビューを試すのである。その際には、学級の掲示などを京都らしく場の設定を整える。さらに、シミュレーションの様子をビデオ撮影して、児童たちの主体的な改善につなげることも可能である。

【コミュニケーション活動】

様々な英語活動の参考書を見ていると、コミュニケーション活動と言いながらも、筆者が提案するコミュニケーション活動の橋渡しの活動であったりする。

コミュニケーション活動の定義を明確にする必要がある。白畑、富田、村野井、若林(1999)は、以下のよう

に定義している。現実のコミュニケーション活動と同じ、もしくはそれに近い言語使用の場を教室内に作り出し、コミュニケーション能力を伸展させることをめざしている。

さらに、白畑、富田、村野井、若林(1999)は、教室での言語活動をコミュニケーションなものにするために、情報転換の原理の利用、情報ギャップ、タスク活動の利用などの原則を提示している。バトラー後藤(2005)もコミュニケーションとは、2者以上の参加者の間で、情報の伝達が行われることであり、情報ギャップの必要性をコミュニケーション活動に求めている。

以上の条件に合うコミュニケーション活動を英語活動の単元や授業に必ず位置づけることが重要である。具体的なものとして、道案内、インタビュー、自己紹介などがある。筆者は、コミュニケーション活動の最適な形態として国際交流活動を中心に据える実践を行ってきた。

【振り返り】

児童の一人ひとりが、今日の活動を振り返る活動である。「ウォームアップ」、「聞くことに慣れる」、「発音することに慣れる」、「コミュニケーション活動の橋渡しの活動」、「コミュニケーション活動」の自己評価をする。どれだけ学習に積極的に取り組むことができたのか3段階評価や自由記述で記録として残しておく。個人のポートフォリオとして活用することができる。さらには、指導者側の評価としても貴重な反省材料となる。

本プロトタイプにおける指導上の留意点を以下に挙げる。

- ・各活動は、「ウォームアップ」→「聞くことに慣れる」→「発音することに慣れる」→「コミュニケーション活動の橋渡しの活動」→「コミュニケーション活動」→「振り返り」の順番で構成する。この順序で活動を構成すると、児童たちにとってスムーズに慣れる活動からコミュニケーション活動へとつながる。
- ・授業の1時間ですべての段階項目を組み込む必要はない。3時間扱いの単元ならば、最初は「聞くことに慣れる」活動を多く取り、次に「発音することに慣れる」を増やし、「コミュニケーション活動の橋渡しの活動」を入れ、「コミュニケーション活動」を最後の授業に設定することが大事である。
- ・1単元には、必ず「コミュニケーション活動の橋渡しの活動」と「コミュニケーション活動」は組み入れる。英語に慣れ親しむだけでは、英語活動の目標に至らないからである。

4. 小学校高学年における英語活動の授業展開プロトタイプの実践例

図5で示した高学年における授業展開のプロトタイプを実際に適応させて実践した6年生の授業(図6)を紹介する。この授業でのコミュニケーション活動は、ネイティブスピーカーがゲストティチャーとして旅行代理店の店員の役になってもらい、児童たちが、自分の行きたい国とその国で何をしたいのかを伝えたりする設定である。

①単元 海外旅行を計画しよう！

②単元目標

- ・英語での国名や“Where do you want to go?”や“I want to go to Australia.”などの表現に慣れ親しむ。
- ・どこの国に旅行したいかを考え、そのことを伝えるコミュニケーション活動を行って英語が使える喜びを味わう。

③単元計画

- 第1次 どんな外国を知っているかな。
- 第2次 国旗で外国に親しもう。
- 第3次 どこに行きたいですか。(本時)

④言語材料

Korea, China, Singapore, Australia, Kenya, UK
USA, France, Italy, Brazil, Chili, Russia
Where do you want to go? I want to go to ~.
What do you want to do? I want to see/
eat/meet/~.

5. 考察

本研究で開発した小学校高学年の英語活動プロトタイプを実際に使用して、スムーズに英語活動の展開が高学年において可能であることが明らかになった。英語活動の授業の始まりから終わりまでの各活動が、コミュニケーション活動という目標に向かってお互いに関連させやすくなる。特に、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる方法として、ウォームアップに続き、聞くことに重点を置いた活動から発音することに慣れる活動へとつなぐことで、児童の負担を少なくしてスキル面を扱うことができる。さらに、慣れる活動から、表現の応用場面であるコミュニケーション活動に移るのは、児童にとってギャップが大きすぎることもあり、コミュニケーション活動の橋渡しの活動の役割が大切であることもはっきりしてきた。

筆者は、2008年度に国の事業である「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」に指定されている大阪府泉南市と泉佐野市の小学校2校の現職教員研修に関わっている。そこで、本プロトタイプの導入を行い、実際の研究授業での使用を試みている。今後、この2校での実践事例を詳しく調べ、問題点や改良点を検証することが必要であると考えている。

【始まりのあいさつ】

【ウォームアップ】

コンピュータで教師自作コンテンツを用いて世界の国々(国名)についてクイズに挑戦した。

【聞くことに慣れる】

世界地図と飛行機の模型を使った世界旅行ゲームを行った。

【発音することに慣れる】

電子キーボードを用いて発音練習を行った。

【コミュニケーション活動の橋渡しの活動】

旅行代理店の場面をシミュレーションで行う。

各自、自分の行きたい国としてみたいことを英語で言う練習を行い、担任が旅行代理店の店員になってシミュレーションを行った。

【コミュニケーション活動】

ネイティブスピーカーの方をゲストティーチャーとして迎え、旅行代理店の店員役で、児童は自分の行きたい国やしてみたいことを伝える活動を行った。

【振り返り】

振り返りプリントに本時の各活動の取り組みの自己評価を3段階で行った。

【終わりのあいさつ】

図6 小学校高学年の英語活動プロトタイプを使った授業展開例

参考文献

- ベネッセ教育開発センター(2007)『第1回小学校英語に関する基本調査 ―教員調査報告書』ベネッセコーポレーション
 バトラー後藤裕子(2005)『日本の小学校英語を考える』三省堂
 東悦子、江利川春雄、辻伸幸、磯辺ゆかり(2008)「小学校英語教員の教育実践力育成のための試案」『和歌山大学教育学部紀要人文科学』第58集
 樋口忠彦、金森強、國方太司(2005)『これからの小学校英語教育』研究社
 伊藤弥香、金澤延美(2006)「小学校英語の指導者に求められる資質と必要とされる指導者研修 ―公立小学校教員の英語活動に関する意識調査―」『小学校英語教育学会 紀要』第7

号 pp.1-6

- 泉恵美子(2007)「教育大学における小学校英語への取り組み ―教員養成と現職教員研修の充実を目指して―」『小学校英語教育学会 紀要』第8号 pp.75-82
 金森強(2003)『小学校の英語教育 ―指導者に求められる理論と実践―』教育出版
 金澤延美、伊藤弥香(2007)「英語活動に関する公立小学校教員の意識調査 ―小学校英語の指導者の資質と指導者研修について―」『小学校英語教育学会 紀要』第8号 pp.61-68
 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版
 Morley, J(2007) *Aural Comprehension Instruction: Principle and Practices Teaching English as a second or foreign Language*, edited by M. Celce - Murcia. (2nd ed.). Boston: Heinle & Heinle, a division of Thomson Learning, Inc.
 岡秀夫、金森強(2007)『小学校英語教育の進め方 ―「ことばの教育」として―』成美堂
 白畑知彦、富田雄一、村野井仁、若林茂則(1999)『英語教育用語辞典』大修館書店
 高橋美由紀(2006)「小学校英語における教師研修 ―「訪問型」と「訪問型と集中型」を併せた教師研修の在り方―」『小学校英語教育学会 紀要』第7号 pp.7-12
 津田塾会(2007)『It's for the kids! Book 2 最強の小学校英語レッスンプラン54』明治図書